

コメント 中世都市鎌倉における千葉氏と都市空間

馬淵 和雄

1. 新しい生活形態の出現と銭の経済

- ・ 竪穴住居から掘立柱式の平地住居へ／かまどから囲炉裏へ
→釜から鍋へ＝「蒸す」から「煮る」へ
- ・ 陶器窯の出現→壺・甕・すり鉢セットの普及
→「貯蔵する」・「卸す」・「潰す」調理法が可能に
- ・ 日常食器への中国製品の進出／貨幣経済の浸透
→宋を核とした東アジア経済圏への組み込まれ
- ・ 碗・皿セットの出現と寸法の規格化—土器・陶磁器・漆器、いずれにおいても
- ・ 列島を一周する海上交通網の整備 →物資の遠距離移動が可能に—西北九州産の滑石鍋が平泉に／熊本の砥石が津軽に（ただしこのことをもって、中世の特徴ということとはできない。縄文時代の交易もかなりのもの）
- ・ 鎌倉時代後期の商人・職人—漂白と定着／職能集落の出現 →「町場」（都市的な場）の出現・「村」との還流システム

2. 鎌倉における「町びと」の成長と「町場」の整備

- ・ 鎌倉時代前期 →早くも豊かな消費生活（中国産磁器食器の大量出土）
- ・ 建保三年（1215）七月十五日、商人の数を規制する最初の法令
- ・ 泰時の鎌倉 →元仁元年（1224）北条泰時三代執権に
嘉禄元年（1225）幕府移転、大倉から「宇津宮辻子」へ
「始打丈尺」→武士の居館群から商・職人の集住する「町」への街区再編（馬淵 1994）
和賀江津開港

3. 五代執権時頼の時代

- ・ 北条氏得宗の専制化
- ・ 都市空間の概念化とケガレ観念の制御
→都市内の住み分け構造を明確化。鶴岡八幡宮を囲む区画を都市の中核部と認識し、幕府要人・顯官などの居住空間とした。大町大路以南（推定）は「浜地」（「浜の屋地」の意）とし、さらに浜ノ鳥居以南の海岸地帯を「前浜」として、特定宗教の差配する空間とした（馬淵 1994・1998 ほか）。
- ・ 前浜という空間—町なかの死穢を打ち捨てる場、動物を解体する場 →無数の人骨・獣骨の出土
都市の中の異空間？死穢の観念をどう制御するか？
- ・ さまざまな職能民の活動する場 →私鑄銭・骨や角の細工師・動物解体業者・港湾労働者（竪穴建物の出現＝海上輸送物資の倉庫か）・死体を損壊する職業者の存在。山本幸司の「開かれた空間」（山本 1986）？（馬淵 1991・1998・2004 ほか）→中世的職能における「ケガレ」観念再考の要（保立 2002）

4. 都市空間の中の千葉氏

- 千葉氏の鎌倉屋敷

「甘縄」(鎌倉市街地西側山裾の古代以来の勝地)の現在の市役所～市立御成小学校一带に「千葉地」の遺称地あり

- 俸禄分配者としての千葉氏と法橋長専

年貢米を収納する倉があるべき(湯浅 1999)? → 「千葉地」隣地に「蔵屋敷」の遺称(現在の鎌倉駅西口前面一带)。ただし「蔵屋敷」の地名は鎌倉に3カ所あり。材木座のその隣地には「浜高御倉」の遺称地があつて、関東御領の倉庫群とも(高橋 1996)

為替決済の発達と長専(保立 1993)

注

高橋慎一郎 1996『中世の都市と武士』吉川弘文館

保立道久 1993「切物と切銭」『三浦古文化』53 三浦古文化研究会

保立道久 2002「都市の葬送と生業」『中世都市鎌倉と死の世界』高志書院

馬淵和雄 1991「都市の周縁・周縁の都市」『青山考古』9 青山考古学会

馬淵和雄 1994「武士の都鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社

馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社

馬淵和雄 2004「叡尊・忍性教団の考古学」松尾剛次編『持戒の聖者 叡尊・忍性』吉川弘文館

山本幸司 1986「貴族社会に於ける穢と秩序」『日本史研究』287 日本史研究会(のち1992『穢と大祓』平凡社所収)

湯浅治久 1999「鎌倉時代の千葉氏と武蔵国豊島郡千束郷」『市立市川歴史博物館年報』第16号平成9年度

